立教観光学研究紀要　第 17 号　2015 年 3 月
St. Paul's Annals of Tourism Research No.17 March '15
pp.3-14.

論　文

観光開発の場におけるグローバルな実践

－スリランカ海浜地域ヒッカドゥワにおける国際結婚を事例として－

ニルマラ　ラナシンハ

本研究はスリランカ南部海岸地域の代表的な海浜リゾート地であるヒッカドゥワにおける国際結婚を事例とし，国際結婚の成立状況と，それが個人や地域社会，現地の観光産業へ与える影響について明らかにすることを目的とする．調査では，諸外国における国際結婚に関する文献調査，ヒッカドゥワでの聞き取り調査および参与観察を実施した．文献研究では，特に観光地における国際結婚の元になったセックスツーリズムやロマンスツーリズムの枠組みに着目して，分析を行った．聞き取り調査及び参与観察では，国際結婚をした現地の女性及び男性，国際結婚後にその場に定住している外国人女性（日本人），在地住民を対象に行った．ヒッカドゥワでは 1970 年代から国際結婚が見られ，訪問する観光客の変化によって国際結婚自体も変遷している．その変遷過程を把握することで，グローバルなレベルでの観光の潮流に合わせて，ホスト社会が多様な面で影響を受けていることが明らかになった．観光を通した国際結婚は，セックスツーリズムやロマンスツーリズムの単なる延長ではなく，それらが重なったところに成立しているという本稿の議論は，既存の研究をより補完するものである．

キーワード：国際結婚，セックスツーリズム，ロマンスツーリズム，スリランカ

1．はじめに

観光は経済的な面だけでなく，社会文化的な面でも観光地に影響を与えている．その中で近年最も注目され，議論される現象の一つとして，地元住民と観光客との国際結婚が挙げられる．

従来，観光と関係する国際結婚の多くはセックスツーリズムやロマンスツーリズムの文脈の下で成立し，フィリピンや日本，タイ，アメリカ，カリブ海周辺地域，インドネシアといった国々で存在するとされてきた（Cohen, 1982; Dahles and Bras, 1999; Herold, et al, 2001; Nyanzi, et al, 2005; Pruitt and LaFont, 1995; Wonders and Michalowski, 2001）．Wonders と Michalowski はセックスツーリズムが成立する最大の原因として，観光と途上国の人々による国際移民を挙げている．先進国の人々はエキゾチックな楽しみや他者を求めて国境を越えた観光をしており，途上国の人々は経済的状況を改善する手段として性的な仕事（Sex Work）を求めて移民している（Wonders and Michalowski, 2001）．従来のセックスと観光の関係にまつわるイメージは，セックスワーカーとの性交渉を求めて発展途上国へ旅行する先進国の裕福な男性が想起されることが多かった．

観光におけるセックスの中で特に注目されているのは商業的な性交渉であり，先行研究ではその様々な形態とそれに関わる問題が議論されてきた．例えば売春のための女性の取引（Rao, 2003），性産業ワーカーの搾取（Rao, 1999），性犯罪（Brown, 1999），児童売春，児童虐待，セックスツーリズムによる HIV の普及（Cohen, 1988; Agrusa, 2003; Leung, 2003）などが挙げられる．従来，セックスツーリズムは売春の部分集合であると捉えられてきたが，Oppermann は，広い意味でのセックスツーリズムの枠組みを定義し，売春とセックスツーリズムが相互に強く結びついているとしても，両者は同様ではないと指摘している（Oppermann, 1999）．Graburn は 70 年代後半のセックスツーリズムに関する殆どの研究はアジア，特に韓国，日本，タイ，フィリピン等を中心に議論されていると指摘した上で，観光と売春の関連性が高いラテンアメリカや東・西アフリカ，

ヨーロッパ等の他地域における女性観光客を対象とした売春の存在は無視されてきたと述べている（Graburn, 1983）.

90年代後半になるとセックスと観光の関係について，狭い意味での商業的なセックス産業に限らず，ロマンスを捜し求める行為に性交渉が伴う場合もあることが議論されるようになった（McKercher & Bauer, 2003）．そのような議論から，観光とセックスとの関係についても，恋愛関係も含めた非商業的な性交渉という部分が注目を集めるようになった.

特に90年代の後半から女性観光客向けのセックス市場が認識されるようになり，ヨーロッパから発展途上国へ旅行する女性と地元の男性（特にビーチボーイ）との関係を対象とした研究も行われるようになった（Dahles and Bras, 1999; Herold,et al, 2001; Karch and Dann, 1981; Kempadoo, 2001; Meish, 1995; Pruitt and LaFont, 1995; Taylor, 2001）．これらの女性観光客と地元の男性との関係では，男性は直接金銭を要求しないが，間接的に金銭か他の利益を得られるような長期的な関係を望んでおり，女性の場合は特にロマンチックな関係を求めてリピーターになっているケースが多い．そのため先行研究では，女性観光客の観光先における性的な関係はセックスツーリズムという文脈の中だけでは処理できないと指摘され，代わりにロマンスツーリズムという枠組みで議論されるようになった（Meish, 1995; Pruitt and LaFont, 1995）.

これらの研究は，男性観光客が地元の女性に求めるのは「セックス」，女性観光客が地元の男性に求めるのは「ロマンス」というように，観光客のジェンダーの違いによって，異なる枠組みで議論してきた．これに対し de Albuquerque は，女性観光客と関わるロマンスツーリズムの概念を強く拒否し，女性観光客とビーチボーイの間の関係も男性観光客と同様な金銭に関わる単なるセックスツーリズムに過ぎないと指摘している（de Albuquerque, 1998）．さらに Herold らは，「セックス」は男性，「ロマンス」は女性，のように女性観光客と男性観光客それぞれ別のグループとして捉えるべきではないと述べている（Herold et al, 2001）.

本稿でも男性観光客は「セックス」，女性観光客は「ロマンス」，という二分法的な議論を疑問視し，ジェンダーの違いに係わらず観光を通して国際結婚が成立しているという立場をとる．つまり，Herold らに近い視点で，ロマンスツーリズムとセックスツーリズムは相互に異なる性格を持つものの，お互いに共通し重なる部分があることに注目する．そしてスリランカにおける，在地住民と外国人女性・男性観光客の国際結婚を事例に，セックスとロマンスという観点から国際結婚の成立とその影響について分析する.

スリランカにおける観光とセックスに関しては80年代から児童セックスツーリズム（Beddoe, 1998; Miller, 2011），特にビーチリゾートのセックス市場による悪影響について数名の研究者が言及している（Mendis, 1981; Nakatani, et al., 1994; Ratnapala, 1984）．Samarasuriya（1982）は観光が在地の女性にもたらす影響について，70年代のヒッカドゥワでは貧困から脱出するために観光で訪れた外国人との結婚を望む女性も多く，それによって国際結婚も登場していたと言及しているが，観光に伴う国際結婚に関して詳細に論じた研究はいまだに存在していない.

従って本稿はヒッカドゥワにおける観光に伴う国際結婚と当事者の思惑，およびそのプロセスとその場におけるグローバルな実践が個人かつ地域に与える影響を明らかにすることを目的とする.

特に，現地女性と男性観光客との結婚はなぜ減少したのか，ビーチボーイと女性観光客との結婚がなぜ登場したのかという，今まで考察されてこなかった部分を解明する.

既述したように，これまでの研究では地元住人と観光客の国際結婚は「セックスツーリズム」と「ロマンスツーリズム」という異なる枠組の下で，それぞれ議論されてきた．それに対し，本稿ではそれらの枠組みを同時に参照し，考察することで，その両者が重なったところで国際結婚が成立するという議論を展開する．これにより「セックスツーリズム」と「ロマンスツーリズム」というそれぞれ異なった枠組みから行われてきた従来の研究を，より補完することが可能だと考えられる.

2. 観光地としてのヒッカドゥワ

本論文が対象とする調査地ヒッカドゥワは，スリランカ南部に位置する代表的な海浜リゾート地

である．1960 年代から観光が導入され，1970 年代からは急激に観光開発がなされた（Hikkaduwa Special Area Management Plan, 1996）．特に，シュノーケリングやサーフィン，スキューバダイビング，珊瑚礁ウォッチング等のレクリエーション活動がなされている観光地である．ヒッカドゥワの主な観光エリアはワウゥゴダ, ウェワラ, ナーリガマの三つの地域である（Rathnapala, 1984）．2014 年現在ではさらに隣接するクマーラカンダまで観光エリアが拡大している．

ヒッカドゥワにおける観光は，特に国際観光客を対象としており，ドイツをはじめとしてデンマーク，スウェーデン，日本，オーストリアからの観光客が多く，最近ではロシア人も増加している. また, 長期滞在型リゾートでもあるヒッカドゥワにおける観光客の均滞在期間は約 20 日間であり，スリランカ全体の観光客の平均滞在期間である約 10 日間よりも長い（Tantrigama, 1996）．

3.　観光を通した国際結婚

（1）国際結婚に関する分析

観光を通して行われる性交渉や親密な関係の構築に起因する国際結婚については観光研究や婚姻移民研究によって議論されてきた（Angeles and Sunanta, 2007; Brennan, 2004; Cohen, 1982, 2003; Dahles and Bras, 1999; Herold, et al, 2001; Kempadoo, 1995; Nyanzi, et al, 2005; Pruitt and LaFont, 1995; Samarasuriya, 1982; Toyota and Thang, 2012; Wang, 2007）．これらの研究は外国人花嫁（Foreign brides），メール・オーダー花嫁（*Mail order brides*），文通花嫁（*Correspondence brides*），性労働者（*Sex workers*），愛人（*Lovers*）等，様々な形態の国際結婚に言及してきた．このような多様な形態を取る国際結婚には主なパターンとして 2 つ挙げられる．パターン 1 は発展途上国の女性と先進国の男性との結婚であり（Brennan, 2004; Cohen, 2003），パターン 2 は発展途上国の男性と先進国の女性との結婚である（Dahles and Bras, 1999; Herold, et al, 2001; Kempadoo, 1995; Nyanzi, et al, 2005; Pruitt and LaFont, 1995; Samarasuriya, 1982; Toyota and Thang, 2012）．途上国ではジェンダーに係わらず，男女とも国際移民か物理的な利益を期待として先進国の外国人との結婚を狙っていることが指摘されている．先進国の男性の場合はエキゾチックな他者（Exotic other）や出身国の女性とは異なる女性らしさを求めており（Angeles and Sunanta, 2007; Cohen, 1982; Wang, 2007; Wonders and Michalowski, 2001），先進国の女性の場合は癒しや自分探し，出身国の男性から得られない愛情や思いやり，経済的優位性による女性上位を国際結婚の思惑にしていると指摘されている（Dahles and Bras, 1999; Herold, et al, 2001; Meish, 1995; Nyanzi, et al, 2005; Pruitt and LaFont, 1995; Toyota and Thang, 2012）．

このような問題意識から，何人かの研究者が国際結婚自体やその思惑・成立プロセスや結婚後の状況について詳しく論じている．ヒッカドゥワにおいても前述した 2 つのパターンの国際結婚が当てはまるため，ここで各地における国際結婚について詳しくみてみる．

Cohen の研究では，タイを訪れる西洋人の男性とタイの女性との国際結婚でタイに住み着いた人を中心とし，タイ社会の様々な社会階層間の結婚である「社会間通婚」（*Intrasocietal Mixed Marriage*）と，タイ人と外国人との結婚である「トランスナショナルな社会間通婚」（*Intersocietal Transnational Marriage*）を区分することでタイにおける国際結婚について述べている． Cohen は，タイにおける国際結婚では結婚後タイに住み着くより海外に渡る事例のほうが多く，特にアメリカ・カナダ・ドイツ・オーストラリア・日本といった国に移民するという目的で国際結婚を目指しているタイ女性（殆どがセックスワーカー）が数多く存在し，国際結婚を促進する特別な結婚市場が作り出されていると指摘している．

タイに住み着く国際結婚には最後まで続くものもみられるが，夫婦二人の間または外国人の夫と妻の家族の間で起こるジェンダーや社会的，宗教的，文化的なコンフリクトによって離婚に至ってしまう場合もある．外国人男性の場合はタイでビジネスを開業するという思惑で結婚したがる者もおり，タイ女性の場合もその思惑は，ただ外国に渡ったり，裕福な主人の財産で贅沢な暮らし方をしたりしたいといったことに過ぎず，外国人相手に結婚詐欺を繰り返すケースもみられる（Cohen, 2003）．

また Brennan はセックスツーリズムを通して

国際的なリンクを形成し国際移民を目指しているドミニカの都市サウサ（Sausa）における女性の戦略について取り上げ，ドミニカで見られる国際結婚は「生存戦略（Survival Strategy）」（基礎的なニーズを満たすための戦略）よりも「向上戦略（Advancement Strategy）」（現在の生活状況をもっと改善しようとするための戦略）だと指摘している．地方からサウサへ移動するシングル・マザーは，自分が抱えている経済的問題を考慮し，大金を入手できる売春を仕事として選択する．しかし，その殆どが西欧，特にドイツの男性観光客を相手としており，セックスサービスと共に愛情も見せることにより，男性観光客と長期的な関係を形成しようとする．このような女性は，男性観光客を「歩いているビザ」（Walking visa）と見なしており，彼女たちの最終的な思惑は国際移民である．しかし，男性側からの詐取や嘘等により結婚後失敗する場合も多い．だが外国人との交際中や結婚中に得られる利益，さらにはヨーロッパに移住できる可能性などを考慮し，サウサの女性は外国人との国際結婚を積極的に目指している（Brennan, 2004）．

一方，Toyota と Thang は，インドネシアの男性と結婚してバリに住み着く日本女性を事例とし，そのような国際結婚や婚姻移民に至る日本人女性の思惑やそのプロセスについて議論している．アジアにおける殆どの国際結婚の事例は日本，韓国，台湾，シンガポールの裕福な男性との結婚を望む東南アジアの女性を扱っていた．だが Toyota と Thang は，バリの事例を日本人女性が東南アジアの男性と結婚しそこで住み着くという点で通常とは逆のパターンとして捉え，その特徴を考察している．Toyota と Thang は，日本人女性が懐かしさと癒しという感情でバリのアートや舞踊等の文化に憧れリピーターになっており，ストレスのある日本社会から逸脱して，自分探し（Self-discovery）を欲求していった結果として国際結婚が成立していると述べる．自分とは異なる生活環境・地域社会に入り，バリ社会における社会的な義務も果たしながら，家族を支え，子育てもしている日本人女性たちが，新しい自分を探すと言う動機で多様な困難を乗り越えながら，バリを「精神的な住処」（Spiritual home）と感じ，バリ人の配偶者と住み続けていると指摘している（Toyota and Thang, 2012）．

タイと西欧，およびドミニカとドイツを扱った2つの事例も共に上記のパターン1を取っているが，それぞれの思惑により異なる形態をとっている．しかし，これら2つの事例でも女性の思惑は一致しており，より良い生活状況を求める点で共通している．ヒッカドゥワにおいても男性・女性に係わらず，既存の生活状況よりも基礎的なニーズがより満たされている生活を求め，国際結婚というグローバルな戦略を選択している．

またヒッカドゥワでも結婚後スリランカに移動した日本人女性が多いことから，日本人女性が出身地を離れて住み着いているバリの事例も本研究で参考にできる部分がある．日本人女性とバリ人男性の結婚のような，途上国の男性と先進国の女性に関する結婚自体を対象とした報告は少ないが，セックスツーリズムやロマンスツーリズムに関する先行諸研究は，現地の男性と女性観光客の関係について議論し，男性の中には女性観光客と結婚して移住することを望む者が存在することを指摘している．このような国際結婚では普通女性の方が年齢が高く，女性が若い男性の外見・性的なパワー（Sexual Prowess）や性格に惹きつけられることが指摘されている（Dahles and Bras, 1999; Herold,et al, 2001; Nyanzi, et al, 2005; Pruitt and LaFont, 1995）．特にジャマイカにおいては先進国の女性は自分の経済力を利用して女性が上位に立つことを求めていることから，その地域社会における男女の力関係（Power relations）も変化すると指摘されている（Pruitt and LaFont, 1995）．現在のヒッカドゥワでもビーチボーイと女性観光客との結婚が一般化していることから，上記の研究を大いに参考にできる．

（2）ヒッカドゥワにおける国際結婚

1）観光産業への地域住民の関わり

国際観光導入以前の1960年代のヒッカドゥワにおける主要産業は漁業，石灰産業とココヤシ殻繊維業であった．だが観光産業が導入された60年代以降，地場産業が変化し，地域全体が急激に変化していった．この地域における観光開発の初期段階である1960年代前半に生じた観光産業は，正規のゲストハウスやレストラン，ローケツ染め，縫製などであり，従事していたのは地域外の富有階層，ヒッカドゥワの裕福な上層階級とわずかな

中流階級の人々に限られていた．1960 年代後半になると，ヒッカドゥワを訪れる観光客が大幅に増加した．この時期から観光による経済的利益を理解した中流階級や低所得層も民宿や土産店の店員といった雇用形態で観光産業に参入するようになった．特に，ヒッピータイプの観光客が大量に流入したことによって，政府に登録されていない違法な低価格宿泊施設への需要が高まり，低所得層にとって観光産業に参入するのが容易になった（Samarasuriya, 1982）．

観光が進展し始めた 1970 年代からは地域住民が観光客と親密な関係を築くようになり，それが国際結婚に至った例も数多く存在する．このような親密な関係が生み出される要因は主に 2 つある．一つ目は，ヒッカドゥワは長期滞在型リゾートであるため，外国人観光客の地長期滞在によって，地域住民と交流する機会が多いことである．二つ目は，地域住民と直接接触できる民衆レベルの観光施設があることである．80 年代のスリランカを対象とした観光研究では，観光地における麻薬，売春，ヌーディズムといった悪影響を議論する際に常にヒッカドゥワが事例として取り上げられ強調されていた．この時期には児童売春，セックスツーリズム，ホモセクシャルな関係も盛んだったといわれる（Mendis, 1982; Ratnapala, 1984; Beddoe, 1998; Miller, 2011）．

2）国際結婚の歴史的変遷

ヒッカドゥワで見られる国際結婚では，男性観光客と現地住民，および女性観光客と現地住民との結婚という両方のパターンが存在するが，時代によってその傾向が変化している．観光が発展していった 70 年代には，現地の女性と男性観光客との結婚が多く，現在は現地の男性と女性観光客との結婚のほうが多く見られる．その原因は，70, 80 年代には男性観光客が多く，90 年代以降は女性の海外観光も流行するというグローバルなレベルでの観光の潮流の変化にあると考えられる．またこの潮流はホスト社会にも影響を与えているため，以下ではそれぞれのパターンを分析することで国際結婚の傾向の変遷過程を把握する．

3）ヒッカドゥワの女性と男性観光客との結婚

前述したように 70 年代から多くのヒッピータイプの観光客が訪れるようになり，自宅を改装したゲストハウスや民宿レベルの低価格の宿泊施設の需要が増えた結果，資本を持たない地元住民も観光に参入できるようになった．このような場合，ホームステイのような形で自宅の部屋を観光客に貸したりする形態も多かったため，観光客と地元住民の関係は家族のように親密になっていった．特に観光客の多くもヒッピータイプだったため，彼らの旅行パターンや性格，さらにビーチリゾートという環境，地元住民の貧困などに起因して，ヒッカドゥワは「麻薬やセックスの楽園」としても認識され，国際結婚も盛んになっていった．Samarasuriya は当時のヒッカドゥワにおける女性の観光との係わりを議論する際に，外国人と結婚した女性についても言及している．1974 年から 1978 年の間にヒッカドゥワで外国人と結婚した女性は 15 人以上いた．花婿は主に北欧出身の中・下流階級の男性であった（Samarasuriya, 1982）．

だがこの時期のヒッカドゥワで見られた現象の特徴は，この地域の女性はセックスワーカーではなく，結婚を前提として，家族の承認も得た上で形成される関係であった点で Cohen や Brennan の事例とは異なっている．これらの女性の中には，直接観光に従事している家庭（特に民宿・土産店）の出身者もおり，また内陸部の女性も含まれるが，全ての者が非常に貧しかった．前者の場合は，自宅が観光エリアに位置しているため観光客と触れる機会が多く，それを契機に親密な関係が形成され国際結婚が成立した．一方内陸部の女性の場合はそのような機会に恵まれておらず，ブローカーを通して結婚相手を決定した．このブローカーは時にはツアーガイドにもなり，観光客の要求（特に麻薬・セックス等）に応えようとしている人々であった．ブローカーは，スリランカ人女性との結婚を望む年輩の男性観光者の要望に応えるために，観光エリアの内陸部に住むスリランカ人女性の中から，彼らの結婚相手を探していた．ヒッカドゥワではタイのように花嫁探しを目的としたツアーは存在しなかったが，個人的に花嫁探しに来る観光客がいた．他方，もし女性側の家族が娘を外国人と結婚させたいと考える場合には，このようなブローカーにその意思を伝えていた．そして両者の要求が一致したところで国際結婚が成立するのである．ブローカーは男性側から相当な額の金銭を受け取り，女性の家族も謝礼として金銭を要求する場合がある．それ以外にもブローカーは，外国人男性に現地女性の両親に対する金銭的援助

を約束させることで，女性の家族から結婚の承諾を得ていた．通常スリランカ人と結婚するのであれば，花嫁側から花婿に持参金を渡すのが伝統的な規範だが，国際結婚の場合は持参金の負担もなくなり，代わりに金銭が得られるため，国際結婚のほうが女性側の家族にとって利益となる．結婚後は女性が男性の出身国に移住するのが普通である．女性側の承認を得た後に2週間程度で結婚し一緒に帰国する場合もあるが，女性のための航空券を持参して再訪問する約束をし，男性が先に帰国する場合もある（Samarasuriya 1982）．

このような国際結婚では前述のように外国人男性のほうが年輩であり，40，50年代の男性が20代の女性を結婚相手として希望する場合が多いが，それほど年が変わらない場合も少なからず存在する．女性側の結婚動機は貧困からの脱出であり，自分のためのみならず家族全員のためであった．そのため国際結婚した女性が外国から送金し，ヒッカドゥワでの土地購入や家屋の新築，兄弟姉妹の教育の支援をする場合もある．だが当時はスリランカでは外国人と結婚する女性の評判はあまり良くなく，売春婦というレッテルが貼られていた（Samarasuriya, 1982）．

また特にスリランカ人女性の離婚経験者が外国人と再婚する傾向もあった．ある男性のインフォーマントは「子供の頃からの女性の友達が離婚したため，彼女の家族は再婚させようと相手を探していた．でも誰かが見合いに来ても，近隣の人は彼女の悪口を言ったため，見合いは一度も成功しなかった．結局彼女は観光客と付き合って再婚し，外国に移民した．今は二人とも幸せだから，国際結婚ができる機会があるのはいい．」と語っていた．外国人と再婚した他の女性（48歳）は以下のように語った．「結婚していたスリランカ人男性はすごく厳しくて，いつも喧嘩したり私を殴ったりしていた．ずっと我慢していたが耐えられなくなり2006年に無理やり離婚した．再婚したドイツ人（58歳）は，コロンボの旅行会社で働いている兄の友達だ．彼はスリランカが大好きでここの女性と結婚したいと言っていた．彼はまだ向こうで仕事しており，ここに長く住めないので，2011年に結婚して以来，年に3，4回行ったり来たりしている．外国人はスリランカ人男性よりすごくいい人だ．正直で女性を尊敬して守ってくれる」．このように，国際結婚は女性自身のみならず，その家族にも多様な役割を果たしており，特に観光客からの金銭や移民の機会は経済的地位向上に繋がっているといえる．一方，ヒッカドゥワの離婚経験者の女性達の語りからは，スリランカ社会において外国人男性との国際結婚は，スリランカ人女性に社会的規範や負担から逃れる機会も与え，人生を再開させる手段として大きな役割を果たしていることがうかがえる．

4）ヒッカドゥワの男性と女性観光客との結婚

ヒッカドゥワの男性と外国人女性観光客との国際結婚では，ビーチボーイ[1]と女性観光客，ビーチボーイ以外の観光産業に従事している男性と女性観光客という二つのタイプがみられる．その中でも，ビーチボーイと女性観光客との結婚が近年最も頻繁な現象となっているため，ここでは両者の国際結婚について述べる．

文献資料からは，スリランカではかつて児童売春とビーチボーイの間になんらかの関係があったことがうかがえる（Beddoe, 1998; Miller, 2011）．Ratnapalaはスリランカでは80年代の後半ごろからドイツ，フィンランド，ノルウェー，フランス，オーストラリア，イタリア等の国からの観光客の間で児童売春がはじまったと指摘している（Ratnapala, 2000）．90年代には外国人男性観光客による児童セックスツーリズムが広く認識されており，Beddoeはビーチボーイも男性観光客と性的な関係を持つが，同時に金銭のために他の児童にも売春を促すと指摘し，ビーチボーイがいなくならない限り児童買春は全くなくならないと述べている（Beddoe, 1998）．これに対しMillerは，児童に強制的に売春させるようなビーチボーイのマフィアのようなものは存在せず，ビーチボーイが金銭を目的に自発的に性的な行動を取る以上，彼らは性的に搾取された子供ではないと主張した（Miller, 2011）．こうした議論がなされてきた一方で，筆者の現地調査からは，関連する政策の試行や観光に伴うホスト側の経済的地位向上等の結果，現在のスリランカ，特にヒッカドゥワで児童セックスツーリズムは殆ど存在しなくなったことが明らかになった．

いずれにせよ新たな収入源として観光が登場し，ヒッカドゥワの住民が何らかの形でその利益を得ようとした結果，児童売春が発生したと言える．観光導入当時，子供たちは外国人からチョコレートなどのお菓子や小さなギフト，少

額の金銭をもらおうとしており，両親もそのような行動を受け入れていたことが報告されている（Samarasuriya, 1982）．さらに，Beddoe と Miller の文献を分析したところビーチボーイの殆どが少年時代の児童売春経験者であるとうかがえる（Beddoe, 1998; Miller, 2011）．そして，女性観光客の訪問が増加するに伴い，こういった男性の観光での役割も拡大し，ビーチボーイと女性観光客との国際結婚が成立するようになったと考えられる．さらに，ヒッカドゥワで観光が発展する前段階から，現地女性と男性観光客の国際結婚という現象が登場していたことも，ビーチボーイと女性観光客の結婚を促進したと思われる．

ビーチボーイと女性観光客の国際結婚が現れた時期には，彼らの国際結婚に対する思惑はヒッカドゥワの女性と同様に貧困から逃れ，自らの生活状況を改善しようと海外に移住することだった．ビーチボーイと女性観光客の出会いはヒッカドゥワの女性と男性観光客の場合とは異なり，ビーチボーイが従事する観光にて行われる．しかし，フォーマルな形でレストランやゲストハウスや土産店を開く資本を所有していない彼らは現地ガイドや，マリンスポーツのインストラクターとして働き，またそのための装備の販売などを行いながら，女性観光客との関係を作ろうとしている．殆どのビーチボーイがヨーロッパからの女性観光客が自分たちの黒い肌が好きだと自慢に思っている．彼らの殆どが英語を初めとする数ヶ国語で概ねの会話を行う能力があり，それぞれの言語で「Hi, Hello」と女性観光客に話しかける．女性観光客と接触し，関係を深める場所はビーチ，路上，クラブである．

これらのビーチボーイが果たしている役割はセックスのみならず，女性観光客の要求に合わせた飲食やダンス，娯楽等，様々である．また両者の関係が深くなった場合には女性観光客の滞在中に案内などをして常に行動を共にする．セックスはそうした活動の一つだという点で売春とは異なり，性行為のための金銭は要求しない．もし女性観光客と恋愛関係になった場合，一般に毎月最低 3 万ルピー（日本円で 2 万 7 千円程度，通貨レートは 1 円 =1.09 ルピー）程度は送金されるため，殆どのビーチボーイは観光客と恋愛関係になることを目指す．関係が長期的になる場合，普通の電話のみならず Skype や Viber 等の最新の通信ツールも使用して連絡を続ける．女性観光客がビーチボーイのことを気に入れば，年に何回もリピーターになり，殆どが 2，3 年のうち結婚する．90 年代頃は 40 ～ 50 代の女性との結婚が多い傾向にあったが，現在は年下か同世代同士の結婚に代わっている．

ヒッカドゥワではビーチボーイが，ドイツ，デンマーク，フィンランド，スウェーデン，オーストリア等のヨーロッパ人女性や日本人女性と結婚した事例がみられる．ほとんどの場合，結婚後は海外に移住するが，最近になってヒッカドゥワに住み着くカップルも見られるようになった．その原因は 2009 年のスリランカの内戦終結後，スリランカの観光が発展し，これらのカップルがヒッカドゥワで観光関係の仕事ができるようになったからだと思われる．しかし，現在でも結婚直後のカップルの多くは海外移住をしており，現地に住み着くことにしたカップルの 2 割程度も結婚直後は海外移住していた人々である．後者のカップルたちは，海外で貯蓄をし，自らのビジネスを開業できる見通しがついた段階で，ヒッカドゥワに戻り，住み着いた人々である．

現在，ヒッカドゥワにはスリランカ人と日本人のカップルも住み着いている．筆者の現地調査から，ヒッカドゥワには現在 15 組のカップルが存在していることが明らかになった．筆者はこのうち 4 組のカップルにインタビューを行ったが，4 組すべてがゲストハウスやレストランを所有している．外国に移住した人々の中にも毎年休暇になるとヒッカドゥワに戻ってくる者もいる．定着している 4 組のうち一人の日本人女性だけが配偶者のビジネスを手伝っているが，残りの 3 組ではビジネスは全て男性が中心に運営しており，女性は家事や子育てに集中している．これらの女性たちは「スリランカもヒッカドゥワも大好きだ．ここののんびりした生活はとても気に入っている．今はカレーも作れるし，シンハラ語も大体分かる」と語った．どの日本人女性も結婚後配偶者の家族・親戚と親密な関係を続けているが，皆配偶者の実家ではなく個人の家を建て別々に住んでいる．2014 年の現地調査では，裕福なオーストリア人夫婦の養子となったスリランカ人女性と結婚したビーチボーイにも出会った．彼はその当時，観光エリアで高級なゲストハウスを建設中だった．彼の周囲の人は「裕福な家庭の養子と結婚で

もしないかぎり，あのビーチボーイの現在の状況は到底考えられないものだ」と語っていた．

4. 国際結婚による影響

ヒッカドゥワでは現地女性と男性観光客，現地男性と女性観光客といういずれのパターンであっても国際結婚はいずれかの側から経済的地位向上を目指す，成功のための階梯として見なされてきた．特に，女性の国際結婚が普及していった70，80年代はヒッカドゥワに観光が導入された直後であり，貧困層が多かった．そのため既述したように現地女性が外国人と結婚する場合，結婚決定時に謝礼をもらい，娘が移住したらその家族に毎月仕送りするという約束もあったため，当時の貧困な家庭にとって新たな収入源ともなった．さらに，その送金をもとに土地の購入や，家の新築，兄弟姉妹の教育支援を行ったため，経済的のみならず社会的地位向上にも貢献したと思われる．女性観光客と結婚している男性（ビーチボーイ）の場合も同様であり，移住後もスリランカの家族に仕送りをしたり，新たな設備のある家を建てたりしている．特に日本人と結婚してヒッカドゥワに住み着いている一人のスリランカ人男性は，自分の家族は非常に貧しかったと過去のことを語ってくれたが，現在彼は観光エリアで最も裕福で影響力のある人物になっている．

このように現在のヒッカドゥワでは経済状況の改善が社会的地位の向上に繋がっている例が頻繁にみられる．ビーチボーイは外国の女性と性的な関係を持つ等の役割や行動のため，結婚前の性交渉に関して厳格なスリランカ社会の伝統的な規範から逸脱している者として見なされているが，国際結婚は多様な面で彼らのエンパワーメントに繋がっているといえる．特に現地の観光に従事している者はビーチボーイや国際結婚を好意的にみており，社会的・経済的弱者や教育レベルの低い者にとって国際結婚は大きな成功の道だと述べている．同時に国際結婚の成功例はこれから結婚を目指しているビーチボーイの意欲を高めている．かつてヒッカドゥワでは国際結婚はそれほど認められていなかったため，特に女性の場合は実際にセックスワーカーではなくても外国人と結婚するだけで売春婦と言われ評判が悪くなっていた．しかし，前述のビーチボーイの事例と同様に，移住による経済的効果は現地の女性やその家族にもプラスの影響を及ぼしている．すなわち，当該地域においては国際結婚に対するネガティブなイメージもかつてはあったが，それは一時的なものであり，移住に伴う経済的地位向上によって社会的な地位も改善されるのである．

国際結婚の全てが成功するとは限らないが，何らかの形で家族や地域に肯定的な影響をもたらしている．特に，2004年の津波被害の際は，外国人女性配偶者が現地男性の家族または地域住民に援助を行った．災害時に援助できるような経済力のある人物が家族にいることは，その家族にとって精神的な安定にもつながる．このようなことから，観光を通した国際結婚が個人的のみならず，社会的な利益をもたらしているといえる．さらに，結婚後移住した人々の中には，自分の両親や兄弟姉妹をヨーロッパに連れて行く者も見られる．ドイツや日本，デンマーク等に年配の両親が旅行するためには，その子供が国際結婚して移住していなければ，不可能である．

また結婚後海外に移住して得た貯蓄をもとにヒッカドゥワに戻り住み着いている外国人とスリランカ人のカップルがビジネスを開業する傾向があることは，観光で成立した国際結婚が最終的に現地の観光産業の発展に繋がっていることをうかがわせる．さらに，80～90年代から小規模な事業を所有し観光に従事してきた人たちですら達成できなかった大きな成功を，現地の経済的弱者であるビーチボーイが国際結婚を通して獲得している．

これらの事例から分かるように，国際結婚は結婚する当事者自身をはじめ，その家族や親戚にも経済的かつ社会的な影響を及ぼし，その地域社会の特定の側面をグローバル化させているのである．

5. おわりに

本論文ではまず既存の研究を整理し，諸外国において国際結婚が成立するパターンと，それぞれの思惑や成立過程について把握した．先行研究の多くは観光に伴う国際結婚はセックスツーリズムやロマンスツーリズムを基にして形成されたものであると指摘してきた．本稿では，スリランカの

事例に注目することにより，特にビーチボーイと女性観光客の場合では，セックスツーリズムやロマンスツーリズムのどちらか一方の文脈ではなく，両者が重なったところで国際結婚が成立する事が明らかになった．これは，これまでの研究に欠けていた部分を補う点で意義がある．すなわち，性的な関係を通じて両者が親しくなり，さらにそれぞれの思惑が一致したところでロマンスや恋愛関係に繋がっていくという点である．両者にとってセックスは第一の目的ではないが，それなしでは結婚に至るまでの親密性は形成されないといえる．

さらに現地調査からは，訪問する観光客の変化によって，ヒッカドゥワの国際結婚のあり方も変遷していることが解明できた．ヒッカドゥワでは，従来の先行研究が議論してきた国際結婚のパターンである発展途上国の女性と先進国の男性との結婚，および発展途上国の男性と先進国の女性との結婚という 2 つのパターンがともに存在する．男性観光客が多かった 70 年代には現地の女性と外国人男性との国際結婚が，80-90 年代には男性観光客による児童セックスツーリズムが現れ，20 世紀末からは女性観光客の増加により現地の男性と外国人女性との国際結婚が流行していった．このビーチボーイの登場と女性観光客の増加の両方が発生したところで，金銭に関わる生活上の問題や既に現れていた現地の女性の国際結婚の影響に伴い，ビーチボーイと女性観光客との国際結婚が成立したのである．従って，グローバルなレベルでの観光の潮流の変化に合わせて，ホスト側が行動し，その現地社会に多様な面で影響を与えていることは，ヒッカドゥワにおける国際結婚の変遷過程を分析することで明らかになったと考えられる．

観光地の女性であろうと男性であろうと，国際結婚を目指す要因は経済的困難を乗り越えるためであり（Brennan, 2004; Cohen, 2003; Herold, 2001; Kempadoo, 2001; Nynazi, et al., 2005; Pruitt and LaFont,1995），それはヒッカドゥワにおいても共通している．しかし，ヒッカドゥワの女性の場合は，セックスツーリズムや売春とは係わりのない女性のほうが多いため，Brennan（2004）や Cohen（2003）の研究とは異なる．

国際結婚を助長する女性観光客の思惑としては，癒し，出身国の男性から得られない愛情や思いやり（Dahles and Bras, 1999; Herold, et al, 2001; Nyanzi, et al, 2005; Toyota and Thang, 2012）が挙げられる．ビーチボーイは女性観光客から自身の経済的状況を改善する手段を見つけ，同時に女性観光客もビーチボーイから特に出身国の男性から得られない愛情や思いやりを感じている．このように両者の思惑が異なり，互いの要求を満たすことができるからこそ，結婚が成立すると指摘できる．

さらに結婚後，外国人配偶者の出身国に移住した場合は，そこの家族または地域社会との間でジェンダーや宗教的，文化的なコンフリクトが発生し，それによって結婚が成功しないこともあるが（Cohen, 2003; Toyota and Thang, 2012），ヒッカドゥワに住み着いた場合はそれほどの影響を受けないようである．スリランカにも伝統的な社会規範等はみられるが，ヒッカドゥワは観光化されていることもあり，バリのような宗教的・文化的儀礼や社会的な義務，大家族のための嫁としての役割は，外国人の嫁にはそれほど期待していない．ヒッカドゥワにも日本人女性が住み着いていることから，先進国の女性が途上国の男性と結婚して途上国へ移住するという，通常とは逆のパターンがある．その点では Toyota と Thang の研究に共通しているが，結婚の成立過程・思惑などがかなり異なっている．特にバリに移住する日本人女性は，そこでビジネスを開業し，家族を支えるようになるが，ヒッカドゥワでは男性を中心にビジネスが営まれており，女性は家事や子育てに集中している点で対照的である．

Brennan のドミニカにおける女性の国際結婚と同様に，ヒッカドゥワのビーチボーイの国際結婚も，「生存戦略」よりも「向上戦略」であると指摘できる．すなわち，かつてヒッカドゥワでは男性がビーチボーイになる主な理由は貧困だったが（Ratnapla,1999; Miller,2011），現在ビーチボーイになっている人々は，餓死寸前の貧困から逃れるためというよりも，外国人との結婚とそれによる移住を通して，より豊かな生活を送ることや，自らのビジネスを始めることを目的としている．さらに国際結婚による経済的発展は社会的地位向上や個人のエンパワーメントにも繋がっており，当該地域における経済的弱者や教育レベルの低い者にとって通常では想像できないほどの成功を遂げている事例も存在する．

以上を踏まえ，ヒッカドゥワの若者が成功の道として選定したグローバルな実践である国際結婚は，結婚するその若者自身をはじめ，その家族・親戚をグローバルな環境に置き，さらに地域社会にも影響を与えていると指摘できる．本論文では，女性観光客側の思惑やヒッカドゥワに移住した外国人やその社会とのやり取りなどについて議論を深めることが出来なかったため，これは今後の課題とする．■

【注】

1）Beddoe は「ビーチボーイ」とは，海浜地域で育ち生活し続けてきた，セックスツーリズムや麻薬と関わりのある若い男性を指していると述べている（Beddoe, 2011）．ドミニカやバルバドス等のカリブ海周辺地域とインドネシアでは「ビーチボーイ」という単語が殆ど同じ意味で使われており（Cabezas, 2004; Herold, et al., 2001; Nynazi, et al., 2005），地域によって Sanky panky, Gigolos, Bumsters と呼ばれることもある．シンハラ語では 'Werala Lamai' と表現され，現地では，'Welle Kollo' という言葉が使用されていたが，本稿ではスリランカでも通常知られている「ビーチボーイ」という言葉を使用する．

【参考文献】

Agrusa, F.J.（2003）. AIDS and Tourism: A Deadly Combination, *In* Sex and Tourism, *Journeys of Romance, Love and Lust*, McKercher, B. and Bauer, ed., pp. 167-180. The Haworth Hospitality Press.

Beddoe, C.（1998）Beachboys and Tourists: Links in the Chain of Child Prostitution in Sri Lanka, M. Oppermann ed. *Sex Tourism and Prostitution: Aspects of Leisure, Recreation, and Work*, Cognizant Communication Corporation, New York, 42-50.

Brennan, D.（2004）Women Work, Men Sponge, and Everyone Gossips: Macho Men and Stigmatized/ing Women in a Sex Tourist Town, *Anthropological Quarterly* 77（4）, 705-733.

Brown, H.（1999）. Sex crimes and tourism in Nepal, *International Journal of Contemporary Hospitality Management* 11（2）: 107-110.

Cabezas, A. L.（2004）Between Love and Money: Sex, Tourism, and Citizenship in Cuba and Dominican Republic, *Journal of Women in Culture and Society* 29（4）, 987-1015.

Cohen, E.（1982）Thai Girls and Farang Men: The Edge of Ambiguity, Annals of Tourism Research 9, 403-428.

Cohen, E.（1988）. Tourism and Aids in Thailand, Annals of Tourism Research 15: 467-486.

Cohen, E.（2003）Transnational Marriage in Thailand: The Dynamics of Extreme Heterogamy, McKercher, B. and Bauer, ed. *Sex and Tourism, Journeys of Romance, Love and Lust*, The Haworth Hospitality Press, 57-81.

Dahles, H. and Bras, K.（1999）Entrepreneurs in Romance: Tourism in Indonesia, *Annals of Tourism Research* 26（2）, 267-293.

De Albuquerque, K.（1998）. Sex, Beach Boys and Female Tourists in The Caribbean, Sexuality and Culture 2, 87-111.

Graburn, N.H.H.（1983）. Tourism and Prostitution. *Annals of Tourism Research* 10: 437-442.

Harrison, D.（1994）Tourism and Prostitution: Sleeping with the Enemy? *Tourism Management* 15, 435-443.

Herold, E, Garcia, R. and DeMoya, T.（2001）Female Tourists and Beach Boys: Romance or Sex Tourism?, *Annals of Tourism Research* 28（4）, 978-997.

Hikkaduwa Special Area Management and Marine Sanctuary Coordination Committee.（1996）*Special Area Management Plan for Hikkaduwa Marine Sanctuary and Environs, Sri Lanka*, Coastal Conservation Department., National Aquatic Resources Agency and Coastal Resources Management Project, Colombo, Sri Lanka.

Karch, C. A. and Dann, G. H. S.（1981）Close Encounters of the Third World, *Human Relations* 34, 249-268.

Kempadoo, K.（2001）Freelancers, Temporary Wives, and Beach-Boys: Researching Sex Work in the Caribbean, *Feminist Review* 67, 39-62.

Leung, P.（2003）. Sex Tourism: The Case of Cambodia, In Sex and Tourism, *Journeys of Romance, Love and Lust*, McKercher, B. and Bauer, ed., pp. 181-195. The Haworth Hospitality Press.

McKercher, B. and Bauer, G. T.（2003）Conceptual Framework of the Nexus between Tourism, Romance, and Sex, McKercher, B. and Bauer, ed. *Sex and Tourism, Journeys of Romance, Love and Lust*, The Haworth Hospitality Press, 3-18.

Meisch, L.（1995）'Gringas and Otavalenos: Changing Tourists Relations', *Annals of Tourism Research* 22, 441-462.

Mendis, E. D. L.（1981）The Economic, Social and Cultural Impact of Tourism on Sri Lanka. Christian Workers' Fellowship, P.O. Box 381, Colombo, Sri Lanka.

Miller, J.（2011）Beach boys or Sexually Exploited Children? Competing Narratives of Sex Tourism and Their Impact on Young Men in Sri Lanka's Informal Tourist Economy, *Crime Law Soc Change* 56, 485-508.

Nakatani, K., Rajasuriya, A., Premaratne, A. and White, A. T.（1994）The Coastal Environmental

Profile of Hikkaduwa, Sri Lanka. *Coastal Resources Management Project of the University Rhode Island*. Colombo, Sri Lanka.

Nyanzi, S., Rosenberg-Jallow, O. and Bah, O. (2005) Bumsters, Big Black Organs and Old White Gold: Embodied Racial Myths in Sexual Relationships of Gambian Beach Boys, *Culture, Health and Sexuality* 7 (6), 557-569.

Oppermann, M. (1999) Sex Tourism. *Annals of Tourism Research* 26 (2), 251-266.

Pruitt, D. and LaFont, S. (1995) For Love and Money: Romance Tourism in Jamaica, *Annals of Tourism Research* 22 (2), 422-440.

Rao, N. (1999). Sex tourism in South Asia, *International Journal of Contemporary Hospitality Management*, 11 (2) : 96 – 99.

Rao, N. (2003). The Dark Side of Tourism and Sexuality: Trafficking of Nepali Girls for Indian Brothels, *In* Sex and Tourism, *Journeys of Romance, Love and Lust*, McKercher, B. and Bauer, ed., pp. 155-165. The Haworth Hospitality Press.

Ratnapala, N. (1984) Tourism in Sri Lanka: The Social Impact., Toronto:UT Back-in-Print Service.

Samarasuriya, S. (1982) Who Needs Tourism?: Employment for Women in The Holiday-Industry of Sudugama, Sri lanka. Toronto: UT Back-in-Print Service.

Sunanta, S. and Angeles, L. (2007) Exotic Love at Your Fingertips: Intermarriage Websites, Gendered Representation, and Transnational Migration of Filipino and Thai Women, *Philippine Journal of Third World Studies* 22 (1), 3-31.

Tantrigama, G. (1999) Coastal Resource Management and Sustainability of Tourism: A Comparative Study of Hikkaduwa, Sri Lanka and Goa, India. University of Sri Jayewardenepura, Sri Lanka, 91-99.

Taylor, J. S. (2001) Dollars are a Girl' s Best Friend? Female Tourists' Sexual Behavior in the Caribbean, *Sociology* 35 (3), 749-764.

Toyota, M. and Thang, L. L. (2012) 'Reverse Marriage Migration' : A Case Study of Japanese Brides in Bali, *Asian and Pacific Migration Journal* 21 (3), 345-364.

Wang, H. (2007) Hidden Spaces of Resistance of the Subordinated: Case Studies from Vietnamese Female Migrant Partners in Taiwan, *IMR* 41 (3), 706-727.

Wonders, N. A. and Michalowski, R. (2001) Bodies, Borders, and Sex Tourism in a Globalized world: A Tale of Two Cities- Amsterdam and Havana, *Social Problems* 48 (4), 545-571.

Global Practices of Touristic Development Destination

-Case Study of International Marriages in *Hikkaduwa*, Sri Lanka-

Nirmala RANASINGHE

International marriages between tourists and locals arose by the 1970's with the development of sex tourism. At that time, affluent male tourists from developed countries traveled to developing countries in order to find exotic pleasures, which caused the emergence of new tourism phenomenon called sex tourism. Though the onset of sex tourism has being marked by male tourists, currently female tourists are also playing a major role in that context, introducing a new phenomenon called romance tourism.

There is research focused on relationships between tourists and locals, which has examined international marriages in Indonesia, Thailand, the Philippines, and the Dominican Republic, but only a few studies have mainly discussed international marriages which originate in the tourist destination. One of the Sri Lankan researchers has also pointed out that international marriages between male tourists and local females could be found by the time of the 1970's in *Hikkaduwa*, Sri Lanka, but no thorough study has been done to identify the characteristics and the impact of international marriages. Therefore it is believed that there is a necessity to research the emergence and development of international marriages in the tourist destinations of Sri Lanka. Thus the objective of this article was to examine the process of international marriages, their expectations and the impact on local individuals and society in *Hikkaduwa*, Sri Lanka. Methods utilized included in-depth interviews with the local female and male spouses and foreign spouses (Japanese females) who settled down in *Hikkaduwa*, participant observation and literature review.

Preliminary findings revealed that both the marriages involving local females-male tourists and those involving local males-female tourists can be found in *Hikkaduwa*, hence the historical transition process was analyzed in order to determine expected results. There were many international marriages involving local females during the 1970's and 1980's when many male tourists visited Sri Lanka, and international marriages involving local males became prevalent by the 20th century with the increase of females travelling abroad. With regard to the local males' international marriages, this article specifically addresses the marriages between beach boys and female tourists, since that phenomenon has become more frequent in recent years. The survey findings identified that whether the international marriage involves local females or local males, the main motivation is economic benefit, and they eventually use it as a ladder to success. After marriage, the prevalent pattern is to migrate to the foreign spouse's country, and especially beach boys migrate with the intention of working in Europe to gain prosperity, aiming to send money to their poorer family members or return in few years to start up a business of their own.

Economic success followed by international marriage is eventually connected to the advancement of the social standards of individuals as well. The migration of local males and females and the visits to Europe by the parents of local spouses to see their children and grandchildren would never materialize until and unless the local males and females had gotten an opportunity of international marriage through tourism. Therefore it can be said that international marriages have caused great impacts not only on individuals, but also on the society as a whole.

Keywords:international marriages, sex tourism, romance tourism, Sri Lanka